
姫さま、騎士と再会する

疋田 中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫さま、騎士と再会する

【Nコード】

N2682BA

【作者名】

疋田 中

【あらすじ】

あるところに、病弱なお姫さまとお姫さまに仕える騎士がおりました。

体の弱いお姫さまは、たくさんの出来なかったことを夢見ながら亡くなります。騎士は、大切な主の夢を叶えたいと思いながら、姫さまを見送ります。

このお話は、そんな二人が転生して出会って、夢を叶えていくお話になる予定。

二人の別れ（前書き）

登場人物が亡くなります。苦手な方はご注意ください。

二人の別れ

「……騎士さま」

か細い声と共に伸ばされたやせ細った腕を騎士の手が支える。

「姫……」

病の床に臥した主の負担にならないよう、騎士はそつと声をかけた。

「騎士さま、わたくしはもう長くありません……」

主は、目を閉じたままつぶやくように言う。認めたくない、否定したい。けれど、病弱な主の体が、もう病に絶えられないことは、ずつと側で守ってきた騎士が良く知っていた。主に嘘のつけない彼は、黙って首を横に振ることしかできない。

「……ごめんなさい。いつか、遠乗りに行きましょうと、言ったのに」

馬に乗って見に行きたいと願った花畑は、見る事ができなかった。

自分で足を運んで菓子を選びたいと言っていた城下の菓子屋は、行くことができなかった。

ここ数年は、室内から出ることも稀になるくらい、彼女の体は弱っていた。

今はもう、起き上がることもできない。

「わたくし、次に目が覚めたら、きつとすっかり体が良くなっているの」

そうしたら、騎士さま。二人で遠くへ出かけましょう。木のぼりもしてみたいわ。夏の小川で水遊びをするのも、きつと楽しいでしょう。いろいろなお店で食べ歩きをして、旅人に遠い国のお話をしてもらうの。

姫さまは、小さくかすれた声で、たくさんの楽しいことを語る。

「次に姫が目覚めたとき、私はきつとあなたの騎士として、あなた

を守りましょう」

そうして、姫。あなたを連れて何処にでも出かけましょう。遠乗りに行く前に、乗馬の練習をしましょうね。小川も良いですけど、海もきつと気に入りますよ。歩きながら食べるのは、お行儀が悪いと侍女に叱られそうですね。遠い国の衣装も、姫ならきつと似合うでしょう。

騎士は、涙で頬を濡らしながら、姫さまに応える。

二人は、来ることのなかった楽しい未来を語る。

いくつものやりたかったこと、見たかったもの、行きたかった場所を挙げ続ける。

いつしか、姫さまの声が聞こえなくなつて。

気付かないふりをした騎士の声だけが、語り続ける。

姫さまは幸せそうに笑つて、それを聞いていた。

もう開かれることのない姫さまの目から、雫がそつと流れて落ちて。

やがて、騎士の声も嗚咽に紛れて消えていった。

> i 3 8 5 8 8 — 4 8 1 9 <

二人の別れ（後書き）

一旦投稿したものの、設定を間違えていたため削除して投稿し直しました。
すみません。

プロットなどなく、てれつと書いていきます。
気がむいたときに続くので、お付き合い頂ける方はよろしく願います。

姫さま、騎士と再会する

新品の幼稚園生の服に身を包んだ幼児が、ベージュのスーツに身を包んだ母親とビデオカメラを回す父親に手を引かれて歩いていた。仲の良い親子三人は、色とりどりのチューリップが咲く花壇の脇を通りぬける。足を踏み入れた小さな庭には、たくさんの遊具が並んでいた。カラフルな遊具には紙の飾りがつけられ、この目出度い日に相応しく華やかな空間を作り出している。

「入園おめでとうございます」

エプロンをつけた女性が、小さな胸に花飾りをつけた。ひまわり組と書かれた札も付いている。

花飾りのお礼を言うと、黄色い帽子を被った頭を撫でられる。この女性は「幼稚園の先生」だろう。恐らく、自分が所属するであろう「ひまわり組」を受け持つ人。愛想良く振舞っておいて損はない。（…いけない、これは幼児らしくない思考だ。）

腹のうちでそんなことを考えながら、表向きに見せるのは、下心など感じさせない満面の笑みだ。こんな風に笑うのは、手馴れている。

ただ、そんなことを悟らせて今生の父母を悲しませる気は無いから、今の自分は無邪気な幼児として振舞わなければならない。

「おとうさん、おかあさん、行ってくるね！」

父母の手を離し、自分と同じ黄色い帽子をかぶった集団に向けて駆けていく。傍から見ればひよこの集団のように見えるのだろうか、と思いつつ、割り当てられた席に着いた。

＊＊

入学式が終わった。

とても短い時間だったのは、じっとしてられない幼児に合わせ

たものだったのだろう。それでも、親を探して泣き出す者や話に飽きて席を立つ者も見受けられた。

かつての自分が幼少の頃はとうであつたろうか。これほどに手の掛かる幼児ではなかったと思う。

「ひめ!!」

そう、かつての自分はお城のお姫様だったのだから。式典など日常茶飯事。

「ひめ、ようやくお会いできました!!」

まあ、体が弱くてほとんどでられなかったのだが。そこまで考えて、ふと意識を現実に戻す。

目の前には、黄色い帽子を被ったちびっこが一人。妙にキラキラとした瞳で、自分を見上げている。

そう、見上げている。跪いて。

かつて、兄妹のように共にあつた騎士が忠誠を誓う、あのポーズで。ああ、この男も生まれ変わったのか。前世の記憶を持ったまま再び会えたことは、素直に嬉しく思う。

「ひめ、きつとお会いできると、信じておりましたっ!!」

目を潤ませて、感激しているのだろう。感情がもろに表に出る。これは、そういう男だった。

だが、時と場所を考えるとやってやりたい。周囲から向けられる好奇の目が、わからないのか。

「ひめ、私をあなたの騎士にしてください。どんなことから、きつと守ってみせます!!」

小さな手が、自分の同じく小さな手をとる。ああ、懐かしい。前世で騎士の誓いを受けたときの、このポーズ。自分の最後に聞いた、その言葉。

しかし、今世の騎士の親は、どんな思いで彼を育てたのだろうか。自分の子どもがこんなのだったら、ちょっと、いや、かなり嫌だ。

「私に、今世の名をお教え下さい。騎士の誓いをさせてください、ひめっ」

かつての主に再会して、興奮しているのだろう。紅潮している少年のほつぺたを掴んで左右に引っ張り、言ってやった。

「おれは、男だっ！ひめじゃなーーーーい！！！」

これは、かつて病弱だった姫さまとその騎士の、ハッピーエンドへのはじまり。のはず。

> i 3 8 6 5 8 — 4 8 1 9 <

姫さま、騎士と再会する（後書き）

のりと勢いだけで書いています。

* B L にはなりません。

姫さま、わんぱくに育つ

寒風吹き付ける中、膝小僧をむき出しにした短パン姿の少年が木の上に立っている。

（こんな格好で外に出たら、ぜったい熱出してたよなあ）

二階建ての建物くらいの高さにある木の枝に仁王立ちして、少年は感慨深く思う。今回の体はずいぶんと丈夫にできているらしい。ありがたいことだ。

前世で叶わなかった木のぼりをするという夢がかなって、少年はご機嫌だ。冷たい空気を胸いっぱい吸い込んで、ぐんとのびをする。

「お前も早く来いよ。気持ちいいぞ！」

声をかけた先には、元騎士がいた。

顔を青くして地上でおろおろと歩き回っている。

「姫、危ないですよ！早く降りてきてください！！いや、危ないですから、ゆっくり、ゆっくりでいいから、降りてきてくださいっ」

前世では無茶なことなどする体力もなかったため、この騎士の慌てる姿など見たことがない。基本的に人の良い笑顔を浮かべている騎士ばかりが記憶にある。それ以外の表情といえば、熱を出した自分を心配して困ったように笑う顔くらいか。

（いや、俺が死ぬときには、泣き顔も見たな……）

そんなことを思い出して、少しばかり胸が痛む元姫さまは、現在小学3年生。前世でできなかったあれやこれやを行うため、日々活動的に過ごしている。そのため、膝小僧の絆創膏は、もはやトレードマークとなりつつある。

ちなみに、元姫さまに絆創膏を貼るのは、元騎士の役目になっていた。

（泣かれても、楽しくないしな）

心配のあまり泣き出しかねない顔でこちらを見上げる元騎士を見て、仕方ないな、と木から降りる。

ひよいひよいと降りていって、のこり１メートルに差し掛かったところで、油断した。

ずる、と片手がすべり、やばっと思った時には、浮遊感。

次の瞬間には衝撃を感じていた。

が、地面にしては柔らかい。覚悟したほどの痛みもない。

「姫、お怪我は！？」

体の下から聞こえた、元騎士の声。

慌てて飛び退いて、彼の手をとって起こす。こちらの心配ばかりしている元騎士に適当に返事をして、彼の服についた土をぱたぱたと叩く。同時に怪我がないかを確認すると、手のひらがすりむけていた。

「絆創膏くれ」

「姫、どこにお怪我をされたのですか！」

手のひらを彼に向けて絆創膏を要求すれば、顔色をさっと青ざめさせて、聞いてくる。

人のことばかり心配する元騎士にいらだち、勝手に彼のズボンから絆創膏を取り出して彼の手をつかむ。急にズボンに手をつ突っ込まれて驚いた彼が飛び退くのも構わず、つかんだ手を引き寄せた。

「怪我したのはお前。おとなしくしろ」

そんな恐れ多い、私などのことはお構いなく、などとわめく元騎士を無視して絆創膏を貼る。貼り終えたその手で彼の頬をつかみ、左右に引き伸ばしてやった。

「にゃ、にゃにをなさりゆのれすか、ひめ」

元騎士の言葉を聞き流しながら、頬を伸ばして遊ぶ。ひとしきり遊んでから、最後に伸ばせるだけ伸ばして手を離す。

「何で庇った」

「姫をお守りするのが、私の使命です」

問えば、即答された。予想通りの答えに、元姫さまは苦い顔をす

る。

「俺はもう姫じゃない。お前に守られる存在じゃないんだ」

「それでも、私にとって仕えるべき人。守るべき人は、あなたです」
迷いなく、まっすぐに見つめてくる瞳は、たしかに前世の騎士と変わらない光を宿していた。わかっている。こいつは、そういう男だ。

それでも、ため息が出てしまう。だって、自分は。

「俺は、お前と一緒に遊びたいんだ」

ため息まじりにそう告げれば、元騎士はぽかんとした顔をしている。

「言っただろう。一緒に遊ぼうって。木のぼりしたい、川遊びしたい、買い食いもしようって、言っただろう」

忘れてしまったのか、と問えば、驚いた顔のまま元騎士は首を横に振る。

「俺は、お前を従えて遊びたいって言っただけじゃない。お前と一緒に遊びたいって言っただけ」

そう言えば、元騎士は感激に頬を染めた。その顔に機嫌を良くした元姫さまは、一番言いたかったことを伝える。

「俺は、お前と友達になりたかったんだ」

前世から、ずっと伝えたかった言葉。かつては身分のために伝えられなかった言葉。今ならば、こんなに簡単に言える。だから、仕えるなんて、守るべき人なんて言って、俺を遠ざけないで。

それを聞いた元騎士は、喜びのあまり泣き出した。涙でべちゃべちゃになった顔はとも間抜けだったが、あの、最後に見た苦しそうな泣き顔とは大違いで。

（こんな泣き顔も、できるんだなあ）

元姫さまはあきれて笑いながらも、元騎士が泣き止むまでその顔を眺めていた。

姫さま、わんぱくに育つ（後書き）

元騎士、ちびっこのときは結構泣き虫です。

元姫さまは、郷に入っては郷に従うタイプなので、少年らしく振舞っています。

少々、やんちゃが過ぎるようですが。

姫さま、お見舞いに行く

前日の夜にランドセルに入れる物を確かめるのは、元姫さまの日課である。

（国語と算数と、明日は音楽の授業があるな。…たて笛は必要だったろうか）

時間割表を見ながら教科書を集めていた元姫さまの手が止まる。音楽の授業は、歌を歌うときもあればリコーダーを使用するときもある。果たして明日はどちらであったか。

ランドセルにしまった連絡長を取り出して、ぱらぱらとめくってみる。

前回の音楽があつた日のページを見るが、リコーダーの必要性を示す言葉はない。今日の日付も確認するが、明日の「持つてくるもの」欄には、何も書かれていなかった。

連絡長を見る限り、リコーダーは不要なようである。しかし、持つてくるように言われたような気がするのだ。

（どちらだったか…考えるほどに不安になる）

不安ならば持つていってしまったえば良いのだが、このたて笛というやつは微妙にランドセルからはみ出る大きさをしている。不要かもしれないのに持つていくには、少々邪魔だ。

元騎士に電話で聞こうかと思つても、時計を見ると夜の九時を回っている。電話は控えるべき時間だろう。元騎士ならば姫さまに頼られたと大喜びで出るだろうが、常識的に考えてやめておいた。

（明日の朝、迎えにきたときに聞こう）

幼稚園での再会以来、あの男は毎日迎えに来るのだ。そのときに聞けばいい、と考えて、元姫さまは布団にもぐりこんだ。

* *

結論から言うと、リコーダーは不要だった。

しかし、元姫さまのランドセルには、リコーダーが入っている。ランドセルからひょこりと飛び出すその邪魔なものを見て、眉をしかめる。

（なんだって、今日に限って休みなんだ！）

今朝、元騎士は迎えにこなかった。幼稚園の入学式から小学5年生になる今日まで、一度もそんなことはなかったのに。

おかげでクラスメイトには、不要なリコーダーを持ってきたことに關して笑われた。お姫さまはお供がいないと駄目なんだな、とかわれた。

担任の教師からは「風邪で休んでるから、宿題のプリント渡しておいて」と頼まれた。家が近い者など他にも居るだろう、と言ったら、いつも一緒に居るんだから、いいじゃないかなどと返された。あいつが付いてくるだけだと言っても、担任は笑うばかりだった。

そんなわけで、元姫さまは現在、元騎士宅に居る。

実は、再会してかれこれ六年の付き合いだが、元姫さまがここを訪れるのは初めてだ。それというのも、元騎士が「私などの家に姫をお招きするなど、恐れ多い」などと言うからだ。

まったくもって不愉快だ。

（友達になりたいと、言っているのに！）

腹立たしいことが重なって虫の居所が悪い元姫さまは、元騎士に文句と、お見舞いの言葉を言っただけで彼の部屋のドアを開けたのだが。

（寝てるのか）

ベッドの中、額に汗を浮かべて眠る元騎士がいた。熱があるのだろう、赤い顔で眉をしかめている。

こんなに弱った元騎士を見るのは、初めてだ。

その顔を見て、言いたかったたくさんの文句など吹き飛んだ。もう帰ろう。そう思い、元姫さまは持ってきた宿題を机の上に置いて、

そつとドアに向かう。

「…ひめ……？」

振り向けば、ぼんやりした顔の元騎士が体を起こしてこちらを見ていた。

「ごめん、起こしたか。もう帰るから、早く寝ろ」

近寄って布団に戻そうと手を伸ばすと、元騎士は体をひねってその手から逃れる。

「いけません、ひめ。あなたに風邪がうつったら大変です」

ショックだった。辛そうにしながら、自分を遠ざける彼にまた腹が立ってきた。

「…俺は、もう病弱な姫じゃない」

絞り出すように言えば、彼は首を横に振る。

「それでも、あなたが寝込む姿は、もう見たくない。お願いです、帰ってください」

「じゃあ早く布団に戻れ」

「あなたを見送ったら、戻ります。布団の中から申し訳ありませんが…」

「お前がおとなしく寝たら、帰る」

「ひめ、お願いですから…」

元騎士は、聞き分けのない子どもに対するように言う。いや、これは病弱だった頃の自分に向けられていた言葉だ。

「…いやだ」

嫌だ、泣きそうだ。

「ひめ…」

瞳を湿らせるものを我慢するために、元姫さまは拳を握り締めて言う。

「俺にも、お前を心配させる！」

ぽかんとした元騎士。涙目で起こる元姫さま。しばらく静寂が続いた。

その後、元姫さまの言葉に感激して大はしゃぎした元騎士は熱が上がり、元姫さまに大いに怒られるのだった。

姫さま、お見舞いに行く（後書き）

あれ、次は高校生くらいに飛ぶはずだったのに…。

なんでこいつら、寄り道ばかりなんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2682ba/>

姫さま、騎士と再会する

2012年1月8日21時47分発行